

10 ルーシー・グレイ

ルーシー・グレイの話はよく耳にしていた
荒野を横切った時
夜明けに 偶然会ったことがある
一人ぼっちのルーシーに

ルーシーには友達がいなかった 5
荒野に住んでいたルーシーは
人間の戸口に育つ子供の中でも
最高にかわいい女の子だった

今でも子鹿は遊び
野うさぎは草の上で戯れる 10
でもルーシー・グレイのかわいい顔は
もう 決して見ることはできない

「今夜は嵐になるだろう
ランプを持って 町まで行って
雪道のお母さんを 15
照らしておあげ」

「お父さん そうするわ
まだお昼を過ぎたばかり
教会の鐘が2時を打ったわ
お月さまはまだ向こうでお休みよ」 20

そこで父親は鎌を取り
薪束のひもを切った
父親は仕事に精をだし
ルーシーはランプを手に取った

気まぐれに野山を駆けまわって 25
雪を撒き散らす山の鹿よりも楽しげに
ルーシーが歩くたび粉雪が
煙のように舞い上がる

嵐が思いがけず早くきた
ルーシーはあちこち彷徨い歩き 30
いくつも丘を越えたけれど
町に辿りつくことはなかった

哀れな両親は一晩中
雪野原を叫んで探しまわった
でもルーシーの声も姿も 35
手がかりとなるものは何も なかった

夜が明ける頃 両親は丘に立ち
荒野を見渡すと
家から少し離れた所にある
木の橋が見えた 40

家へ引き返ししながら泣き叫ぶ
「天国で待っててちょうだい」
その時 母親が雪の中に
ルーシーの足跡を見つけた

両親は険しい丘を下って 45
その小さな足跡をたどった
折れたサンザシの生け垣を通り抜け
長い石垣に沿って進んだ

開けた荒野を横切ると
まだその小さな足跡は続いていた 50
ずっと跡をたどり 見失うことなく
木の橋までやってきた

雪の積もった土手を進み
足跡をたどっていく 一つ一つ
橋の真ん中まで来ると 55
足跡は途絶えてしまった

でも 今日の日まで
ルーシーは生きていると言う人もいる
寂しい荒野で
かわいいルーシー・グレイと会えるという人もいる 60

ルーシーは山も野原も軽い足取りで歩み

決して振り返ることはない
ひゅーひゅーと鳴る風に混じって聞こえる
ルーシーがうたう寂しい歌が

(伊藤真紀訳)